

都道府県別賞一等

母の笑顔と頑張りを支えてくれた生命保険

秋田県 五城目町立五城目第一中学校 二学年

石井 心音

冬の寒い朝、父は車で事故を起こしました。朝早く出勤しなければいけなかった父は日が昇るずっと前に出発していて、暗く、ライトの灯が照らす所しか視界の無い状態で夜中のうちに降り積もった雪で隠れていた氷の轍に気が付かずタイヤを取られ横転。車が脇道に投げ出され大ケガを負った父は救急車で運ばれました。救急隊員から連絡が来て家中が蜂の巣をつついたようなパニックになって大変だったと言います。父は生死の淵をさまよい一命を取り留めましたが、長期の入院を余儀なくされました。その後、父は退院して家で暮らしていますが身体には障害が残りました。今は母の助けを借りながら車椅子で生活しています。

この作文を書き出して、ある疑問が湧いてきました。当時のことを教えてくれる母の明るく屈託のない話し方が、悲惨な父の事故とどうしても合わなかったからです。なぜこの様な違和感を感じるのか気になった私は、母へもう一度事故について詳しく聞かせてほしいと頼みました。当時の様子や家族の気持ちを改めて知りたいと思いました。母は

「大変だったんだよ。」

と少し微笑みながらも真剣な眼差しで教えてくれました。救急隊員からの知らせが来たときは頭が真っ白になって、ただただ父の命が助かることを考えるばかりだったこと。そこから生活していくために、いくつもの困難が待ち受けていることが、ある程度は予想されたこと。中でも、やはりお金のことが心配になったそうです。しかし母は、もしもに備えて生命保険に加入しており、莫大になるであろう医療費について考えなくてよかったと言っていました。幼かった姉と私を抱え、父の世話をし、その上、日常の家事までこなさなければいけない状況で、お金の面だけでも安心できたのは、それだけで困難に立ち向かう勇気になったと聞きました。話の最後に

「こうして今、笑って話せるのも生命保険に入っていたおかげだよ。」
と母は言っていました。

話を聞き終わった後に私なりに調べてみました。生命保険は「相互扶助」という助け合いの仕組みで成り立っています。一人でお金を貯めて備えても限界があります。そこで大勢の人でお金を出し合って、必要なときに大きな保障を受ける仕組みが出来上がりました。蓄えの少ない人でも家族のもののため、

第59回中学生作文コンクール

誰かのものしものために使える、すばらしい知恵だと思えます。

母は私たち家族に暗い表情を見せません。しかし、その明るさの裏にある家族を必死で守る気持ちを想像すると胸を締め付けられる気持ちになります。両親ともにまだ若く、これからという矢先に思いも寄らない交通事故で茫然自失の中、両親はどんな思いで乗り越えてきたのでしょうか。私たちには話せない苦労も沢山あったはずなのに、そんな素振りを見せたことはありません。これまで私たち家族を支え、応援してくれた人たちに、とても感謝しています。そして生命保険も母の笑顔と頑張りを支えてくれて、おだやかで明るい我が家の日常が成り立っていると強く感じました。

この作文を書き始めたとき、ふと感じた違和感は、私が生命保険というものを簡単に考えていたからだのだと思います。改めて母に生命保険の話聞いたことで、相互扶助という助け合いの仕組みが成り立っていることを知り、私も世の中の役に立つとまでいかなかったり、人の役に立つ人間になりたいと思うようになりました。大人になったら生命保険に入り、誰か困っている人たちの支えになりたいと思えます。